

たにくいちだより 10月

サロンでの気づき

サロンを訪問し、気づかせていただいたこと、お聞かせいただいたことなどをお伝えしたいと思います。何かお役に立てれば嬉しいです。

本当に暑かった夏も終わり、朝の風が気持ち良い過ごしやすい、爽やかな季節になりました。

さて、9月13日(月)第19回ナカノワインディングコンペ中四国地区大会を開催させていただきました。



毎年のごとですが、一所懸命、ひた向きに取り組んでおられる選手の皆さんの姿を見ているとものすごくエネルギーをいただけます。

全国大会に出場されるヘアメイクShuriの森岡様、卓美容室の西倉様、道下様3名の方、全国大会でも頑張ってください。

惜しくも選ばれなかった選手の中には、悔し涙を流していた方もいらっしゃいましたが、この悔しさをバネにして、来年の大会、そしてサロンワークに頑張ってください。本当に熱戦ありがとうございました。

さて、最近、サロンを回っていてうれしかった事をお伝えさせていただきます。

来客が減っている、モノが売れないと言われる世の中ですが、得意先サロン様を回っておりますと、当社が販売させていただいた商品の説明をわかりやすく、かわいく、書いた手作りPOPを作って、お客様にPRして頂いているのを見ると本当にうれしく思います。ありがとうございます。

それと、先日あるサロン様を訪問した時、営業を終えられて、ヘッドスパのトレーニングをしておられたようで、「丁度よかった、モデルになってください。」と言われ引き受けると、「気になるところがあったら、遠慮なく、言ってください。」と頼まれました。気になるところを指摘するのは、嫌なものですが、感じたことを遠慮なく、言わせていただきました。

その3日後、先生とコンビニで偶然ばったりとお会いし、「スタッフの皆が指摘されてショックを受け、今度は、気持ち良いと言ってもらえるように毎日練習しています。来週ぜひ、またモデルになってください。」と言われました。

閉店時間前に訪問させていただこうと思っていた日に、前のサロン様で時間が少し長くなってしまい、「9時になるんですがよろしいですか」と電話連絡すると、「今週

は、今日しか空いていないので、待ってますよ」と言われ、急いで伺いました。前回に比べて、手の当り方、シャンプー剤の付け方など創意工夫されており、とても気持ち良くなっていました。が、先生からまた、「気になるところがあったら言ってください。」先生厳しいな、でも先生は、「お客様のため、スタッフさんのため、お店のためになるからお願いします」と言われたので、また、言わせていただきました。

でも、本当にうれしいですね。スタッフの方とこんな風に一緒に取り組まさせていただいて、私の方が逆に刺激を受けて、翌日から凄くエネルギーになりました。何でも根詰めてやっていくと面白くなりますね。私達ディーラーやメーカーのマニュアルも参考になりますが、自分たちが創意工夫してつくったものは、本物です。

この熱い思いがお客様の心を動かすのだと思います。先日もある先生が「シャンプーは、心だからね。」と言われていました。

このサロンでは、あと1ヵ月位研究して、美容師側からだけでなく、お客様から見てすごく得した、安く感じていただけるメニューとして展開して行くそうです。「もう一度、モデルになって下さい」と言われています。最高のシャンプー&マッサージを楽しみにしております。

暑かった夏は終わりましたが、心は熱く燃えて行きましょう。

最後に松下幸之助さんが気に入っておられたサムエル・ウルマンの詩「青春」と、鈴木秀子さんのお話で「縁を生かす」を掲載させていただき終わりたいと思います。

青春 サムエル・ウルマン作

青春とは人生のある期間をいうのではなく、心の様相をいうのだ。

優れた創造力、たくまじき意志、炎ゆる情熱、…(中略) こういう様相を青春というのだ。

年を重ねただけでは人は老いない。…(中略) 歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

人は信念とともに若く、疑惑とともに老いる。
人は自信とともに若く、恐怖とともに老いる。
希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。

(※裏面に続きます)

『致知』2005年12月号総リードに掲載された記事です。

「縁を生かす」

その先生が5年生の担任になった時、
一人、服装が汚くだらしく、
どうしても好きになれない少年がいた。

中間記録に先生は少年の悪いところばかりを
記入するようになっていた。

ある時、少年の1年生からの記録が目止まった。
「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。
勉強もよくでき、将来が楽しみ」とある。
間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

2年生になると、
「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」
と書かれていた。

3年生では
「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」
後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」
とあり、

4年生になると
「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、
子どもに暴力をふるう」

先生の胸に激しい痛みが走った。

ダメと決めつけていた子が突然、
深い悲しみを生き抜いている生身の人間として
自分の前に立ち現れてきたのだ。
先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、
あなたも勉強していかない？
分からないところは教えてあげるから」

少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で
予習復習を熱心に続けた。
授業で少年が初めて手をあげた時、
先生に大きな喜びがわき起こった。

少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。

少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。
あとで開けてみると、香水の瓶だった。
亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。
先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。

雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、
気がつくと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。

「ああ、お母さんの匂い！ きょうはすてきなクリスマスだ」

6年生では先生は少年の担任ではなくなった。
卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。
そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」

それから6年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担当して
もらって、
とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって
医学部に進学することができます」

10年を経て、またカードがきた。
そこには先生と出会えたことへの感謝と
父親に叩かれた体験があるから
患者の痛みが分かる医者になれると記され、
こう締めくくられていた。

「僕はよく5年生の時の先生を思い出します。
あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を、
神様のように感じます。

大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、
5年生の時に担任してくださった先生です」

そして1年。届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」

と一行、書き添えられていた。

本誌連載にご登場の鈴木秀子先生に教わった話である。

たった1年間の担任の先生との縁。
その縁に少年は無数の光を見出し、
それを抛り所として、それからの人生を生きた。

ここにこの少年の素晴らしさがある。

人は誰でも無数の縁の中に生きている。
無数の縁に生まれ、人はその人生を開花させていく。

大事なのは、与えられた縁をどう生かすかである。

以上

縁を大切にし、今日一日を精一杯、元気で頑張ってください。